P・W・S　～Parallel World Story～

ransu521

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐ・Ｗ・Ｓ　～Ｐａｒａｌｌｅｌ　Ｗｏｒｌｄ　Ｓｔｏｒｙ～

【Ｎコード】
Ｎ１９５４Ｈ

【作者名】
ｒａｎｓｕ５２１

【あらすじ】
『この世』は数多なる世界が重なり合うことによってバランスを取り合っていた。しかし、そのバランスは、とある人物によって崩されてしまい、やがて数多ある世界は、崩壊をはじめ、最後には一つの世界のみとなってしまった。自らの世界を取り戻すべく、彼らはそれぞれのやり方で行動を開始する。

preview

世界は無数に存在する。
バラバラに散らばった『カケラ』の世界によって、この世のバランスはうまく釣り合っていた。
『戦い中心』の世界、『青春中心』の世界、『恋愛中心』の世界……。
それぞれの世界は、それぞれ別の役割を果たす。
今までは、それできちんとこの世は成立してきた。
それで、バランスがとれていた。
しかし……。
そのバランスは、とある者の行動により、もろくも崩れ去ってしまった。
そこから、この世のバランスは崩れ始め、幾多にも存在していた世界は、その『崩壊』を始めた。
とある世界の人物達が、別の世界に入り混じったり、あるはずのものがなくなっていたり……。
その規模は次第に大きくなっていき、やがて一つの世界のみしか残らなくなった。
その世界における人口は、膨大な数となってしまった。
もしこの世界をも破滅を迎えてしまったとしたら、その時こそ本当にこの世が滅びてしまう。
そこで、この危機に立ち向かう者達が現れ始めた。
これは、彼らが織り成す様々なストーリー。
結末に至るまでの、様々な者の視点からのストーリー。
結末に至るまでのやり方は、人によりそれぞれのやり方がある。
なので、これは決して一つの結末で終わる物語となるわけではないのかも知れない。
しかし、向かうべき敵、目的は皆同じ。

数多ある世界の『再生』。
それぞれの世界を取り戻すべく、彼らは様々な方法で、一つの解決策を見つけるのであった。

ｐｒｅｖｉｅｗ（後書き）

今小説は、いくつもの作品が入り混じった、クロスオーバー作品です。
多少のキャラ崩壊等、様々な問題が発生することでしょうが、どうかお許しください。
登場作品については、筆者の趣味で選ばしていただきます。
また、この作品のキャラを出して欲しいという要望がございましたら、その作品がもし私の知っている作品であったなら、登場させるつもりです。
それでは、また本編の方でお会いしましょう。

side of 空の境界 1

ここは、どこだ？
目を覚ますと、オレは――――いや、オレ達は見慣れぬ世界にいた。
周りの建物等、もちろんオレの知っている物もたくさんある。
しかし、その建物の一つ一つをよく見ると、形状がまちまち。
まるで、様々の世界から建物だけを移植して来たような、そんな感じだ。
それに、いつも感じている物とは少し違う物が感じ取れる。
何というか……無理矢理世界を一つにしてしまったような、そんな感じだ。

「そうか。気づいていたか」
「燈子……これはどういうことだ？」

どうやらオレの隣にいたらしい燈子が、オレに話しかけてくる。

「この世には、いくつもの世界が存在していることを知っているか？」
「いくつもの世界？何だそれは。そんな話、聞いたこともないぞ」
「まぁ話を聞け、式」

オレの名前を呼びながら、燈子は話を始めようとする。
言い忘れていたが、この女の名前は、蒼崎燈子。
とある事務所を経営している、魔術師だ。
そして、オレの名前は両義式。
……自分のことを説明するのは正直言って面倒だ。
だから、自己紹介なんて、しない。

「この世は、いくつもの目的を、いや、役割を持った世界が存在する」
「いくつもの、役割？」
「例えば私達の世界だと、『根源を求める』世界、他には、『青春中心』世界、『正義を貫き
通す』世界、『希望を求める』世界とかが存在する。それらは独立した世界としてこの世に
置かれ、そうすることでこの世はバランスを崩さずになんとかやって来れた」
「ふ～ん」

適当に相槌を打つ。

「ところが、それが一つの世界まで凝縮されてしまっている……これが何を意味するのか、
式には分かるか？」
「さぁね。一つ言えるのは、この世界はとても住みにくいということだ」

オレにとって、この世界は不愉快だ。
無理矢理一つに凝縮したような、こんな世界から、出来ることなら早くこの場から立ち去りたいとも思っていた。

「だろうな。私も、正直言って、こんな世界から抜け出して、元の世界に戻りたい」
「だったら何とかしろ……それに、黒桐とかはどこに行った？」

そう言えば、さっきからずっと、黒桐の姿が見当たらない。
鮮花なら、一人でも何とか戦えそうだからいいのだが、黒桐は戦えない。

浅上藤乃の行方も気になる所だな。

「あいつらなら何とかなるだろう……まぁ、黒桐は別の話だが」
「なら、早くあいつらを見つけないと……」
「まぁ落ち着け。時間はたっぷりあるんだ。有効活用をしないともったいない」
「……なら、さっきの話を続けろ」

オレは燈子にそう言って、話を続けさせる。

「分かった……話は、世界が一つに凝縮されている、というところまでだったな」
「ああ……だったらなんなんだ？何が問題なんだ？」
「一つの世界に、様々の世界のものが入り交じること……つまり、これは、その世界がすでに滅亡していることになる」
「世界の、滅亡？」

成る程。
これはなかなかに壮大な出来事だな。
もっとも、オレにはあまり関係のないことだが。

「そして、恐らくこの世界は、この世に存在する最後の世界だ。この世界が滅びると、人類は行き場をなくしてしまい、破滅する」
「……簡単に言えば、死ぬってことだな。ここにいる奴ら全員」
「そういうことだ」

それは困る。
オレが死ぬならともかく、黒桐が死ぬのだけは耐えられないかもな。
……ああ、私も弱くなったな。

「それで？オレ達で何か出来ることとかあるのか？」
「あることはあるな。ただし、それは私達じゃなくても出来る」
「早く教えろ」

少し強めに言う。

「分かったよ……この世界の滅亡を止めるには、元凶を叩けばいい」
「元凶？」
「そうだ。恐らくこんな事態にまで発展させた元凶がいるはずだ。しかも幸いなことに、ほぼすべての世界は滅亡している。つまり、元凶もここの世界にいる確率が高い」
「じゃあ、そいつを見つけて、殺せばいいんだな？」

ポケットからナイフを取り出しながら、オレは尋ねた。

「簡単に言うとそんな感じだ。なら、早速行動開始と行くか？」
「そう行きたいところだけど、その前にやらなければいけないことが出来たみたいだ」

オレ達は、周りを見渡す。
いつの間にか、オレ達を囲むように、黒い獣のような形をした何がいた。

「早速おでましってことか」
「燈子はここで見てろ」

オレは足で地面を蹴ると、獣達に向かって突っ込んでいった。

side of 銀魂 1（前書き）

今回は、銀さん中心の話です。
こんな感じに、はなしはいろいろと飛びます。

side of 銀魂 1

（ゴンッ！！）

「いつつ……」

突如として頭に激痛が走り、俺は唐突に目が覚めた。

「ここは……どこだ？」

時刻は分からねぇけど、太陽が真上に昇ってるところから、今が昼なのだと感じさせてくれる。

「しっかし、どうなってるんだこりゃ？まるで無理矢理いろんな建物をごちゃごちゃに建てたようなものは」

明らかに、江戸の街とは違う風景。
ターミナルと同じ、もしくはそれ以上のデカさの建物まである。
それに、何より。

「新八と神楽のやつが、いねぇ」

新八と神楽。
それは、『万事屋』で働く、俺の家族みてぇな存在だ。
この小説読んでるよい子のみんなは知ってるだろうから、敢えて教える必要もないな。
どうしても知りたい奴は、今すぐ書店で『銀魂』を一巻から大人買いしなさい！

「……っと、そんなこと言ってる場合じゃなかったな」
俺としたことが。
危うく新八と神楽のことを忘れるところだったよ。
「とりあえず、ここで立ち止まってるだけ無駄だな。行くあてがあるわけじゃないが、歩いてみっか……って、うん？」
その時。
俺は、隣で眠ってる奴の存在に気づいた。
「女の子……か？」
俺が知ってる奴ではない。
ということは、俺と同じように、ここに迷いこんできたということか？
「……もしも～し」
（ツンツン）
とりあえず、指で頬をつついてみる。
「……っん」
だが、起きない。
つか、背が小さいなコイツ。

しかも、何だか奇妙なぬいぐるみっぽいやつが近くに……って、デカッ！？
何だこの人形、かなりデカイぞ！
定春くらいあるんじゃねぇか！？

「起きろっつの」

（ユサユサ）

今度は身体を揺すってみる。
すると。

「ん……あ、あれ？」

お？
反応あり、だな。

「目覚めたか？」
「ここは……それに、アンタ誰？」

実に失礼極まりない言葉だな。

「俺は坂田銀時。侍だ。お前は？」
「私はアニス……ところで、アンタってお金持ち？」

何だこのガキ？
初対面のやつにいきなりそんなこと聞くか？普通。

「別にそこまで金持ちじゃねぇよ。むしろ、大変なくらいに貧乏だっつの」
「ふ～ん、あっそ」
「あっそって、テメェ……人が折角起こしてやったのに、さっきからなんつー態度とってんだコノヤロー！！最近のガキは礼儀も知らねぇのかよ！」
「そんなこと知ったこっちゃないわよ！私は、お金持ち意外に興味ないのよ！！」
「悪かったな！金持ちじゃなくて貧乏で！！」
……。

「ところで、こんなとこで一人、何やってたんだ？オメー」
「さぁ？気付いたらここにいたのよ」
「……俺と一緒だ」

確かいつもの通りに仕事してたら、いきなり気を失って、気付いたらここに……。

「……連れは？」
「……分からない」

だろうな。

「……会いたいか？そいつらに」
「全員にとは言わないけど、せめてルークか大佐に……」

るーく？
たいさ？
誰だそれ？

……まぁ、いいか。

「なら、ついてくか？」

「え～貧乏なやつと一緒に行くの～？」

「コノヤロ～！人の好意を何だと思ってやがる！」

俺はついに耐えきれなくなった。

思わず木刀でこのガキを殴ろうと思った。

……が。

「何？私とやる気？」

……何か、あのデカイ人形に乗ったんですけど。

やけに迫力あるんすけど。

怪獣映画の怪獣か何かかコイツは！

「悪かった……手は出さねぇよ。けど、一緒に行動した方が得だと思うぞ」

「……分かったわよ」

渋々了承したらしい。

「んじゃ、早速行動開始と行こうか、ガキ」

「ガキじゃないわよ！アニスよ、ア・ニ・ス！！」

「わーたから。大きな声出すんじゃねぇ」

ガキ改めてアニスと共に、俺――――坂田銀時は行動することになった。

side of 銀魂 1（後書き）

まさかのアニスとの出会い。
どうなるかは、本編を読み進めて頂けると分かるかもしれません。
次回はこの話の続き……ではなく、『side of 空の境界』の続きです。

side of 空の境界 2

まずは一体目。

「はぁっ！」

（ザシュッ）

何事もなく、オレはそいつの首を斬る。
斬られたそいつは、影のようにあっさりと消えていった。

「……ん？」

少し違和感を感じた。おかしい。
確かにオレはこいつを斬った。
けど、感覚がない。
まるで、幻を斬っているような……。

「……あの夜と一緒か」

かつてオレが経験したあの夜。
オレは影のような人物達を殺した。
あの時の感覚に、かなり酷似している。
というか、つい最近にも殺りあったような気さえする。

「……コイツ、まさか」

オレは考える。
しかし、そんな時間など与えてなどくれるはずがなく、影の獣は、襲いかかってくる。

「……ちっ」

近づいてくる敵から、一閃。
相手の死の線を見ては、それをなぞるようにナイフを入れる。
……つまらない。
こんな戦い、つまらないったらありゃしない。

「式、気を付けろ。近くに誰かがいる」
「ああ、薄々は感づいてた」

そして感じる、謎の気配。
燈子も気付いたらしく、オレにそう忠告してくる。
だが、燈子自身が動こうとすることはない。
まぁ、黙って見てろと言ったのはオレの方だから、動かなくて当然なのだが。

「ふんっ！」

（ザシュッ）

気付けば、周りにいた奴らはすべて消え去っていた。
変わりに、ある人物が近づいてくる。

「……やっぱりお前か」

「知ってるのか？」
「前に一度殺し合った相手だ」

この時期に似合わないような黒いコートを着て、身長が高め。
人間という存在から逸脱した、所謂人外生物だ。

「こんな悪趣味な獣を出してくるのは、お前しかいなかったな」
「あれだけの獣達を前にしても動揺しない態度。そしてその戦闘形式……やはり貴様は、
両儀式だな？」
「そういうお前は、いつぞやの吸血鬼だろ？」
「吸血鬼……まさか、死徒二十七祖の一人、ネロ・カオスか！！」
「いかにも……その通りだ」

まさかとは思ったが、まだ生きていたとは。
確か、あの街で倒されたと思ったんだが……。

「ふむ。さしずめ、どうして私がここで生きているのかを聞きたそうな顔だな」
「……そうだな。お前はあの日、確か直死の魔眼を持つ少年に殺されたはずだ。それなのに、
どうしてここに生を持つ？人形師でもないお前は、自分の人形など持つはずがないしな」
「直死の魔眼……？オレと同じ眼を持つ奴が、他にも」

少し驚いた様子の式。
まぁ無理もないだろう。
前にあの街に行った時には、そんな少年に出会ってなどいなかったのだから。
いたのは、その殻を被った残骸（タタリ）だけだと思うからな。

「それで？どうしてお前は生きている」
「……我にも分からん」
「は？」
「気づいたらここにいた……恐らく、世界の変動が起こした異常（ノイズ）なのだろうな」
「異常（ノイズ）……」

死者が蘇るという、ノイズ。
つまりは……最悪の可能性すら考えられる。

「おい燈子……これってつまり」
「……ああ。最悪、荒谷が生きてる可能性すら考えなくてはならないな」

それだけは考えたくはないな。
何という考えも、もう無駄なのかも知れないな。

「それで？何故お前は我々を襲撃した、ネロ・カオス」
「ふむ……見知った顔だったのでな。確かめたかったというのが本音だろうな」
「そんなことの為に、お前の獣使うんじゃねーよ」
悪態をつく式。
「済まなかった……と今では思う。だが、両儀式と確かめることが出来たのなら、一つ
　頼みたいことがあってな」
「頼みたいこと？」
「それはだな……」
私達は、ネロ・カオスの頼みごとを飲み込み、その場を去って行った。

side of 空の境界 2（後書き）

次回、「side of テイルズオブヴェスペリア」。
お楽しみに。

side of テイルズオブヴェスペリア 1（前書き）

ちょいとネタに走った感がぬぐえない……。

side of テイルズオブヴェスペリア 1

「……」

目を覚ますと、オレは見知らぬ土地に立っていた。
結界の外の世界……にしては、狭いような感覚を持つ。
何より、様々な世界を無理やり統一したような感じがする。
ハッキリ言って、いずらいことこの上ない。

「はぁ……なんだってこんな奇妙な世界に来ちまったんだ？」

オレは知らず呟く。

「しかし、まぁなんて世界なんだここは」
「本当よね。こんな世界を創造した人物を見たくなるわ」
「だな……って、誰だおまえ？」

いつの間にか、オレの隣には少女がいた。
背はオレなんかよりもとても小さい……カロルと同じくらいか？
髪は長く、青っぽい……のか？

「みー、ボクの名前は古手梨花なのです」
「……オレはユーリだ」

何だ？
いきなり口調……いや、声色からオーラまで変わったぞ？
まぁ、こっちの方が年相応らしいが……先ほどの大人びた雰囲気は一体？

「ではユーリ。一つ聞きたいことがあるのです」
「何だ？なんでも言ってみろ。ただし、言うだけな」
「みー……ここは、どこなのですか？」
「ずばり聞きたくなかった質問だな……」

生憎だが、その質問に答えることはできず。
オレは知らないと答えた。
そうすると、梨花と名乗った少女は、相変わらず『みー』とだけ鳴く。

「何だか話しにくい相手だな……」
「？どうかしたのですか？」
「ああ、いや、なんでもない……そんなことより、一人なのか？」

尋ねてみると、どうやら目が覚めたらここにいて、いたはずの仲間達は見当たらないらしい。
そう言えば、オレもそんな感じだったな。
エステルにカロル、リタ、ジュディス……おっさんにラピード。
おっさんとジュディス辺りは大丈夫だろうけど、他の奴らはどうしてんかな？

「……ん？」

ふと目線を別の方向に向けてみると、そこには少女が男二人に絡まれてる所だった。

「ハァハァ……なぁ永澄。この子、可愛いなぁ」
「キモいぞサル。それより俺達はこの変な世界から脱出する方法を見つけないと……」
「どうせ今回限りの世界ならさ、パラダイスしないと、男として生

きてる価値ないぜ永澄！」
「だーうるせぇなエロザル！やるならテメェ一人でやってろよ！」
……何だあれ？
女の方は顔が見えないが、男の方は相当間抜けだな、こりゃ。
つか、一人は突っ込み役だな。
絡んでるのは、あのサル顔の奴だけか。
「……なんとかなりそうか？」
「行くのですか？」
「ん？ああ、ちょっと見過ごせないからな」
どんな奴であれ、絡まれてるのなら見過ごせない……って、あれ？
一瞬、頭にゴーグルみたいのが見えた気が……まさか。
「……リタか？」
確信はない。
だが、何となくそう思った。
もちろんオレの呟きは聞こえるはずもなく、男二人の漫才は続く。
「おーサル！こんな所にいたんだぎゃ？」
……もう一人ついて来たよ。
しかも、ここ地上だぞ？
何で宇宙服来てるんだ？コイツ。
「もはやなんでもありの世界なのです」
「……なんでもありすぎて、きもちわりぃよ」

とにかく、オレはそいつらに近づく。

「何よ、アンタ」

その時、ようやっと少女が口を開いた。

……この声はやっぱり。

「可愛いから俺達で食べちゃいましょうぜ、殿！」

「いや、俺には燦ちゃんが……だが、ここは男として逃げるわけには！！」

「逃げろ！！そして燦ちゃんへの想い軽いなお前！！」

永澄と呼ばれている、どうやら突っ込み役らしい男は、やはりこの場でも突っ込みを入れる。

オレは、とりあえず足を速めて近づく。

「いただきま～す！！」

まずい。

このままだと、あの男たちがやられる！！

「ちょいと待った！」

オレは、三人の男の前に立ち、そう叫んだ。

side of テイルズオブヴェスペリア 1（後書き）

次回、『side of ONE PIECE』、お楽しみに。

side of ONE PIECE 1（前書き）

難しい……。

ワンピースのキャラを主役にした話って、結構書きづらいんですね。

side of ONE PIECE 1

「はっ！」

（ビュッ）

繰り出される、相手の攻撃。
俺はそれを上半身をそらすことで避けると、すかさず攻撃に移る。

「ふっ！」

（ガキィン！！）

刀と刀同士がぶつかり合う。
その音は俺の耳にうるさく響く。

「ちっ！いい剣さばきしてんじゃねぇか……」
「Ｓｈｉｔ！アンタの攻撃もなかなかのもんだぜ。真田以上かもしれねぇな！！」

俺と似たような声を持つ男。
だが、明らか重そうな装備をしているそいつは、俺の三刀流よりも二倍の、六刀流の使い手。
……何だこいつは？
手に六本の刀を軽々と持つその様子は、今まで戦ってきたどの剣士

よりも奇妙だ。
「だが……これならどうだ？」
俺は構えを取る。
そして。
「三刀流……鬼、斬り！！」
その技を放つ……！！
「Ｈａ！甘いな！！」
（ガキン！！）
「な、何！？」
こいつ、俺の刀に合わせるように、防御態勢に入った！？
「今度はこっちからいかせてもらうぜ……」
「……」
一体、こいつは何者なんだ……？
「ＤＥＡＴＨ　ＦＡＮＧ！！」
「！！」
六本の刀を存分に利用した、相手の攻撃。

その際に見た、眼帯によって一つしか見えない、まるで獲物を狩るかのような瞳。

「なるほど……普通の奴なら恐れをなすだろうな」

だが、俺は世界一の剣豪を目指す男だ。

こんな所で負けてるようじゃ、世界一の剣豪名乗る資格なんてねぇ……！！

「うおりゃあああああああああああああ！！」

（ズギャキン！！）

「なっ！！」

今度の驚きは、相手によるもの。

それもそのはずで、自らの攻撃をすべて打ち返されてしまったからだろう。

「こっからだ……三刀流奥義……三・千・世・界！！」

（ズバズバズバズバ）

「がはぁ！」

斬った。

今の攻撃で、相手の体を完全に切り刻んだ。

「……ヒュ～、今のは効いたぜ」

「……勝負あり、だな」

「ああ……わざと致命傷を避けたんだろ？」

やっぱり気づいてたか。

いや、同じ剣士だ。

気づかないはずがない、か。

「まっ。こうして剣を交えたのも何かの縁だ……次に会った時に、もう一度剣を交えるのも

悪くはねぇかもな」

「Ｈａ！そん時は俺が一本取ってやるよ！」

そう言うと、男は馬に乗り、その場を去ろうとする。

「おい、待てよ！」

「あん？」

「名前ぐらい教えろや」

「……奥州筆頭伊達正宗。お前は？」

「ロロノア・ゾロ……世界一の剣豪になる男だ」

そう伝えると、男―――いや、伊達正宗はその場を去って行った。

……そう言えば、何であいつと俺は戦ってたんだっけ？

「……ああ、そうだ。剣持ってて、俺と似たような声してたからだ」

結局の所、理由はそれ一つ。

しばらく歩いていて、道に迷っていた時に見つけた男。

それが、伊達正宗だったというだけの話。

「……今思えば、なんておかしな理由だったんだろうな」

呟き、笑う。

そして俺は、前へ進む。

……あれ？

ここ、どこだ？

side of ONE PIECE 1（後書き）

次回、『side of とある魔術の禁書目録』、お楽しみに。

side of とある魔術の禁書目録 1

まず最初に、私上条当麻は、言いたいことがあります。
それは……それは……。

「ふ、ふ、不幸だあああああああああああああああああああああああああああああ！！」

……私上条当麻は、例のごとく不幸に遭っております。
その不幸と言うのが……。

「テメェら待てやゴラァ！！」
「さっさと俺達に殺されとけや！！」
「何でお前らなんかに、俺が殺されなくちゃならないんだよ！！」
「何となくだドアホ！！」
「もっと訳分からんわ！！」

まったく理不尽極まりない！！
何で俺がそんな理由で、鉄パイプ持ったお兄さんたちに追われなければならないんですか！！
変な世界に来ちまった時点ですでに不幸だってのに、なおさら不幸が重なってどうするんだよ俺！！

「くっそー！逃げるが勝ちだ！！」
「ちっ。逃げ脚だけは速いな、コイツ」
「この野郎！バッド投げればいいだろうが！！」

何その短絡的思考は！？
バッド投げてそれが頭に当たったら、確実に死んじゃいますよ！？

「そりゃっ！」

ほ、本当に投げて来た！！

……けどあいつら、いくら俺だって、このバットくらい避けられること、想定してたよな？

（ヒョイ）

というわけで、俺はあっさりそのバットを避ける。

「ふぎゃっ！」

どこかで声が聞こえた気がするが、気にしない気にしない。

「今はそれどころじゃねぇえええええええええええええええええ！！」

俺は走る。

この訳も分からない世界の、真昼の時間の街中を。

「ハァハァハァ……さすがにここまで来れば、大丈夫、だろう」
なんとか逃げ切ったぞ……俺は、勝ったぞ！！
「何アンタそこで息切らしてるの？」
……一難去ってまた一難。
今度は一体何！？
「……」
俺は、声のする方を振り向く。
そこには……えらく小柄な女の子がいた。
「……はい？おん、なのこ？」
髪の毛は黒、学生服の上に何故か黒いマントをはおっている。
……一言で言ってしまえば、変だ。
「そうよ。見て分からない？」
「いや……それは分かりますが、どうして、制服の上にマントをはおっているのでせうか？」
思わず不思議な言葉遣いで、俺は目の前の少女にそう尋ねていた。

「ああ、これ？」
すると。
（スッ）
「んなっ……」
あろうことか、そこから剣を抜いてきた。
「お、おい……マジ物か？それ」
「本物よ？当たり前じゃない」
……なんだか、また新しい不幸がやってきそうな気がする。
もう一回言おう。
不幸だ……。

side of とある魔術の禁書目録 1（後書き）

次回、『side of テイルズオブヴェスペリア 2』。
お楽しみに。

side of テイルズオブヴェスペリア　2

「はい？」

三人のうちの一人が反応を示す。

……良識のありそうな人物で助かったぜ。

「悪いんだけど、そいつから離れてくれないか？」

「な、何故だ！？女の子ナンパするのは、俺達の勝手だろ！！」

「そう言う問題じゃねぇよ！てか、ナンパ自体あんまよくないことだろうが！！」

「そ、そうだぞ猿！」

お？

味方が二人か。

これは心強いな。

「で、ですが殿。これは、一世一代のチャンスでござる！」

「使い方間違ってるぞ、それ」

……こいつ、ただのアホだ。

「それに、いつ元の世界に戻れるか分かりませぬ。だとすれば、ここでパラダイスを送った方が絶対……」

「だー！分かんなきゃ言ってやる！そいつは俺の連れだ！俺ん所の女だっての！！」

「！！」

……あれ？
これじゃあ誤解を生みかねないような気がするぞ……？

「……誰が」
「うん？」
「誰があんたの女なんかになったあああああああああああああああああ！！」

（ドンッ！ドンッ！）

「おおっと！」

リタが怒ってファイアボールを連発しだした！！
慌てて俺は避けるも、目の前の事態を把握出来ていなかった他三人は、見事に焼けてしまう。

「おいリタ……いきなりファイアボールなんて連発するなって。他の奴らがコゲコゲに
なってんぞー。どう責任取るつもりなんだ？」
「こいつら、私のことをナンパして来たのよ？これくらい当然でしょ」

いや、一人は確実に止めようとしてただけだよな？
……もはや情けもなしかよ。

「やれやれ。天才は情け無用ってところかよ」
「……ユーリ、終わったのですか？」
「あ？ああ、今終わったぞ。と言っても、半分こいつの仕業でな」

「なっ！……あんたが変なこと言ったからでしょ！！」
「ん？俺はただ、お前は俺の連れだから手を出すなって言っただけだけどな」
「違うでしょうが！！」
「み～顔が真っ赤なのです」
「んなっ！真っ赤に何て……って、この子、誰？」

リタがそう尋ねてくる。
そう言えば紹介がまだだったな。

「紹介しとくよ。こっちはついさっき出会ったばかりの、古手梨花」
「ふ～ん……」
「古手梨花なのです。梨花って呼んでなのです。にぱ～☆」
「に、にぱ～？」

お？
エステルとの会話くらいに動揺してるぞ。
これは面白そうだな。

「それにしても、何処なのよここは。全然わけの分からない世界に来ちゃったみたいだけど……」
「それについては、俺から軽く説明しとこう」

あん？
何か、どっかから声が聞こえたような気がしたけど……。

「気のせいだよな」
「ちっが～う！！気のせいなんかじゃない！！」

俺達は、その声が聞こえる方向を見る。

そこには……。

「いや、本当にお前誰だよ」

思わずそう呟いていた。

その男は、何か鎖っぽい武器を持った、どこか軽い雰囲気を漂わせる男だった。

「俺か？俺の名前はアクセル・ロウって言うんだ。宜しくな、旦那」

「あ、ああ……」

本当に、わけわからない展開になってきたな……。

side of テイルズオブヴェスペリア　2（後書き）

次回、『side of GUILTY GEAR』。
お楽しみに。

side of GUILTY GEAR 1

「いいか？この世界はな、俺達に残された最後の世界なんだ」

俺は、ここに来るまでに聞いた話を、黒くて長い髪の毛の男と、少女二人に話す。

……正直の所、俺もあまり信用していないと言うのが現実だ。

しかし、起こってしまっている以上、信じるしかないのだ。

「は？何いってるんだ？お前」

「そう。それが最初の反応だと思う……俺だって最初はそう思った。けど、街を歩いている

内に、そうも思えなくなってしまったんだよ」

「な、何が言いたいのよ？」

分かりかねているらしい。

俺が今、何を言いたいのか、理解できていない、と言った所だろうか。

「つまりだ。俺達が元いた世界は、消滅したってことだ」

「「「なっ……！！！」」」

三人とも驚きを見せている。

それほど大きな話になるとは思っていなかったって表情だ。

「な、何の冗談だよ、そりゃ」

「そうなのです。そんな話、聞いたこともありませんですよ」

「聞いたことなくて当然だな。こうして一つの世界に集まって、初めていろんな世界がある事

に気づいたくらいだからな」
俺も、ついさっき知った真実なんだ。
まぁ……あまり信じられなかったけどな。

「……まぁ、百歩譲って、この世界がごちゃまぜの世界になってることだけは認めてやる。
けど、俺達の世界が破壊されてるって、一体どういうことだ？」
「何者だかしらねぇが、どうやら様々な世界を壊している奴がいるって噂だ」
「壊してる奴？」

……それこそが、こんな世界を生んだ元凶。
それこそが、俺達の敵。

「そうだ……そいつが、俺達が倒すべき相手なんだ……けど、生憎その敵というのがどんな
奴で、どんな目的でそんなことをしたのかは知らない」
「それじゃあ、戦いようがないじゃねぇか」
「そうなんだ……それで俺は困ってるってわけ」
「ふ～ん……」
「けど、私達にも、何も出来ることはないのです」

だよな……。

「……とにかく、ここから動こう。俺達はこっち。お前はあっちだな」
「だな。それじゃあ、女の子の護衛はあんたに任せたぜ」
「……ああ」

「……おい」
「……」
「……おいっつってんだろ！」
「アン？」

何かうっせーな。
どこから声がすんだよ……。

「おい、聞きたいことがあんだけど」
「何だよ、こっちは忙しいんだっつーの」
「全然忙しそうに見えねぇんだけど……ひとつ聞くぞ」

何だこいつ？
俺と同じような武器もって……。

「ここは、どこだ？」
「……知るか」

「だよなぁ。あんたも気づいたらここにいたってたちか？」
「そうなるな」
……ったく、面倒臭ぇやつだ。
「……じゃあな」
「……」
黙って別れたそいつからは、尋常じゃない力のオーラがまとわりついていた。
……あいつ、人間だよな？

side of GUILTY GEAR 1（後書き）

次回、「side of CANAAN」、お楽しみに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1954h/

Ｐ・Ｗ・Ｓ　～Parallel World Story～

2010年10月22日00時59分発行